

釈迦の十大弟子

摩訶迦葉

(まかかしよう)

摩訶迦葉はインド名、マハーカッサバといい、この人は王舎城にほど遠からぬところに住んでいた大富豪の子として生まれましたが、ピツパラ樹(菩提樹)の下で生まれましたので、ピツパラヤナと名づけられました。摩訶迦葉(マハーカッサバ)はお釈迦さまのお弟子になってからの名であります。この人は物事をよくわきまえておられ、頭もよく感覚も鋭く、その上、心も非常に純粹で、迷いの世間を厭う心深く、欲望の不浄であることを感じ、しきりに涅槃を願っていられたようです。従って出家の志が非常に強かったのですが、たった一人の男の子だったので両親はどうしても出家を許しません。両親の願いでやむなく結婚し家庭生活に入られました。

後に、両親は亡くなりました。それを機会に妻と相談のうえ、出家いたしました。そして諸方を訪ね歩きついに釈迦さまと出会い、お弟子となったのであります。摩訶迦葉の妻も非常に純粹な女性で、自分も出家したいという願いを抱いていたといわれています。だから釈尊の教団に比丘尼(婦人の出家)が加えられたときに出家して、かねてからの志を果たしました。夫婦揃って釈迦さまのお弟子となつた一例であります。前に申しましたような事情があつて、弟子入りの遅れた摩訶迦葉は、入門した時はすでに相当な年輩で、従つてお釈迦さまより年長(3歳年上)でありましたし、また非常に高潔で、求道一筋という純粹な方でありましたので、お釈迦さまも尊敬しておられ、弟子というよりも、客分というようなお気持で接しておられたようであります。

弟子の中で、頭陀(duka)第一と呼ばれておりました。頭陀というのは最低の生活に満足するという修行でありまして、粗末な衣を着、粗末な食事をして、粗末なところに住む、それ以上何も求めないという生活であります。だから彼は釈尊から譲られた衣を一生涯着て通しました。この衣はお釈迦さまの弟子になった当初、摩訶迦葉は立派な衣を着ておられました。お釈迦さまの粗末な衣を見て、取り替えてさしあげたのであります。お釈迦さまから頂いた衣を死ぬまで手放すことはありませんでした。また裕福な家からは托鉢をせず、貧しい家から差し出す食事を喜んで受け粗末な食べものだけで生活しておられました。また彼は静かに一人で修行することを好み、木の下端座したり、あるいは路地や墓地で寝たり、そういうことをしながら、あちらこちらを修行して歩いてお

れました。こんな話もあります。あるとき、久方ぶりにお釈迦さまのもとに帰つて来られましたが、その時にお釈迦さまのお側にいたのは、新しく弟子入りした者ばかりでした。それで摩訶迦葉のことをよく知らなかつたようで、迦葉の入つて来た姿を見た弟子たちは、何ともひどいその格好に驚いて、どこの物乞いかと、さげすみの眼でながめておりました。その時世尊は、目ざとく迦葉の姿をみとめられて、「迦葉よ、よく来りました。さあどうぞこちらへ」と自ら半座を譲つて、そこへ招かれました。弟子たちの驚いたことはいうまでもありませんが、迦葉は恐縮して「世尊、私は末座の弟子であります。とうていそのような場所に座することはできません」と固く辞退しています。釈尊のお心はどうあろうと、彼はあくまでも弟子であるという帰依の心は変わりませ

にもかかわらず世尊の仰せに従わなかつたことが三つあつたといわれています。一つは布施を受けて新しい軽い衣にかえなさいといわれたことでありました。しかしお釈迦さまから譲られた衣を、破れては繕つて大切にしている迦葉には、この仰せを聞くことは出来ず、つぎはぎで重くなった衣を一生引きずるようになって着ていられたといわれています。二つは、時には長者(金持ち)の家にも招待を受けて、たまには身体に力のつくような食物の供養も受けなさい、これは迦葉の老体を案じられたからでしょうが、それも聞きませんでした。迦葉はお釈迦さまより年長でありましたが、迦葉より先立つてお釈迦さまは、クシナガラで涅槃に入られました。御遺体はしばらく莊重にお祀りして、七日目に荼毘(火葬)に付すというしきたりになっておりました。その時、遠方にて

釈尊の入滅を聞いた迦葉は、とり急ぎクシナガラへ駆けつけたのですが、何しろ老齢でありましたため、道がはかどりません。明日はクシナガラに着けるといふ所まで到着したのが、はや七日目でありました。夕方になつて彼は、クシナガラからやつて来たという一人の婆羅門に会いましたが、その婆羅門はこう申しました。「今日はクシナガラで、いよいよお釈迦さまを茶毘に付するということで、仏弟子がたは忙しく立ち働いておられました。今ごろはもう火葬も済んだでしょう」これを聞いた迦葉は本当に泣きくずれました。大切な世尊の最後のお姿を拝むことができない。何という情けないことであるか、と非常な悲しみにしずんでしまったのであります。一方、その日のクシナガラでは、今日は七日目ということ、釈尊を茶毘に付す準備もとのい、いよいよ仏弟子が、積んだ薪に火を

点けたのであります。いくら火を点けようとしてもついに燃え上がりませんでした。これは天の神々が、迦葉が帰ってくるまでとあるので、火の燃えるのをとどめておつたのだといわれております。一日遅れて八日目、迦葉はクシナガラに着きましたが、まだ火葬は終わっていませんでした。そこで迦葉が自ら火をつけますと、一斉に勢いよく燃え上がったといわれています。お釈迦さまが待つておられたのでしょうか。念願を果たした迦葉も、さぞ嬉しかったことでしょう。釈尊亡きあと、教団の混乱を恐れた摩訶迦葉は、直ちに經典の編纂を思い立ち、500人の主だった弟子を王舎城に集めて、第一回の經典編纂(第一結集)を成しとげたといわれております。釈尊入滅後から、迦葉自らが入滅するまで一生涯、釈尊の残された教団を束ねて、混乱のないようにお弟子たちが仏道を励むよう、

一生懸命に力を尽くされたのが摩訶迦葉であります。

「死にともない!」
今、精一杯の一言

江戸時代の終わり頃、九州は博多の聖福寺に、「仙厓さん」と呼ばれ、多くの人々に慕われた禅僧がおられました。晩年のこと、88歳の仙厓さんは、いよいよ臨終というまさにその時、「死にともない」とつぶやきました。それを枕元で聞いたお弟子さん達はビックリ仰天です。「え、いったい何を仰るのですか!」
「どうか有り難い末期の一句をお願いします」と、皆が詰め寄りました。すると仙厓さん、渾身の精気をふりしぼって、「ほんまに、ほんまに、死にともない!」
と言つて息を引き取られたのでした。この逸話、みなさんはどう思われましたか。「仙厓さ

んつて、本当に親しみやすいお方だね。」「私たちと同じで、やっぱり死ぬのは嫌なんだよ」と、つい笑いがこぼれてしまいます。けれど、この「死にともない」の一言には、何かもつと深い真実が込められているのではないのでしょうか。私たちは誰だつて「死にたくない」と思っています。でも「人生」とは「生」と「死」がセットになつてい

とがあつて、悲しいことがあつて……。でもそんな旅のすべてが、何かとてもワクワクする胸おどる楽しい時だと感じるのはどうしてなのでしょう。もし、この「人生」を「旅」として見る事ができたら、辛く苦しい出来事や嫌なことに対する見方も今ま